

《論 文》

グロサリ：『特命全権大使米欧回覧実記』 帰路に見る固有名詞表記 —地名・国名を中心として—

渡 辺 邦 博

1. はじめに

明治4年（1871年）陰暦11月12日横浜を出発した岩倉使節団は、およそ1年10か月にわたる米欧12カ国の回覧を終えて、1873年陽暦9月13日に同港に帰港した。この使節団による報告書『特命全権大使米欧回覧実記』は、出発当時権少外史、後に帝国大学教授となった肥前出身の久米邦武が、明治11年博文社から出版したものである。汗牛汁棟とも言える研究が蓄積されたこの第一級の史料について、ここに改めて考察を加えようとする。

本記録の研究者・田中 彰は、大使一行がつねに日本とアジアを念頭にヨーロッパとの対比を行ない、ヨーロッパ人が「有形の学」の進歩によって「農工商」の実益を発見し「富庶繁栄ノ媒」とするが、アジア人は「無形の学」に関心を持つのでそうしたことは無関心となっていることを指摘。

例えば米欧各地の「草木園」や「禽獸園」と日本のそれを対比すると、日本とアジアの場合は、珍奇奇木によって人目を驚かすに過ぎないのに対して、ヨーロッパの場合には、動物や植物の生態がそのまま観察できるようになっており、「搜羅討索シ、類ヲ以ッテ品列ス」として、発想の根本的な相違を指摘している。また、政治に関しても、東洋の政治が「道徳ノ政治」であるのに対し、西洋のそれは「保護ノ政治」で、生命と財産の保

護を基本としている。その結果、東洋には「自主ノ権」を必要としないが、それは西洋社会が「尽ク会社団結ノ氣風ヲ具有スル」のを元に、「自主ノ権」が「総テノ事理」となっているからである。

何故そうした相違が生じたのかを鋭く認識しつつ、使節団はヨーロッパ文明＝歴史の進歩との確信を持って帰国する。

もちろん彼らの「文明信仰」は手放しのものではない。彼らは明治6年（1873年）7月20日、マルセイユを出発して、地中海から紅海、インド洋、東シナ海を経て、中国沿岸に立ち寄りながら横浜に到着するまでのアジア・アフリカの各地で見聞した、「白皙赤髯ノ航客」による「暴侮ノ挙動」を看過している訳ではない。彼らなりに、植民地・半植民地にやってきたヨーロッパ人は、文明国から「棄テラレタル民」であるとの認識を持っていた。ⁱ

田中彰は、文庫版第5巻に付された解説「岩倉使節団とヨーロッパとアジア」の三「ふたたび『米欧回覧実記』について」で、この資料が各国別の地理的、歴史的背景の説明から現状、政治・経済・社会・思想・宗教・文化などのあらゆる分野を網羅し、挿入された図版の建築史、絵画史、技術上の意味を有し、さらには各国への旅行の興味深い手引きとなることを指摘している。

さらに、これは、「文学・文章論からいっても注目すべきものがある。文章自体簡にして要をえ、歯切れよく格調も高い。情景描写ひとつをとってみても、惚れ惚れするところが多々ある。明治記録文学の傑作といっても決して過言ではないのである。」「そして、翻訳史からみても、この『米欧回覧実記』で初めて漢語を当てた翻訳も多いはずである」としている。ⁱⁱ

驥尾に付して、『回覧実記』（以下、『特命全権大使米欧回覧実記』）を単

i 田中 彰 [1977]、180-184ページ。

ii 久米 [2005] ⑤、382ページ。

に、『回覧実記』または、もっと略記して『実記』と称する)の帰路に現れたアジア諸地域の地名並びに国名をリストアップした。

この『回覧実記』が、日本語で書かれているとは言え、既にカタカナ漢字混交文をスラスラと読める人は現代では少なくなり(事実、参考文献に示したように、本書の現代語訳まで登場している)、さらには、現代日本語においても、地名国名には「漢字」ではなく、カタカナが使用されて、漢字で書かれた国名に接しては、一瞬読者の思考が中断される場合もある。一括したリストが手元にあればと思った次第である。

また、同じ国名の表記であっても、日本の漢字文発祥の地「中国」(中華人民共和国と中華民国の両国)における表記と、わが国の表記と必ずしも一致しないのには、相応の文化的な理由があるようにも思われる。

後者の課題に即答できるようなものを今の私は用意していないが、この漢字表記の相違には考察に値するものが存在するようにも思われるのである。

2. 『回覧実記』の構成

『回覧実記』は、本文合計2110ページ、地図10、図版314(うち、風景図等309、その他5)で、全5編、100巻から構成される。とりわけ、銅版画は風景図としては出色の出来であると評価されているが、今日でも関係箇所立つとなるほどと首肯させられるものもある。この100巻の構成を大まかに見ても、使節団ないしは当時の明治政府の米欧各国に対する関心度の比重を知ることが可能である。すなわち、最も関心を寄せたのは米・英のような「大国」であるにしても、「小国」への関心度も低い訳ではない。そうした中で、何故プロシアに親近感を持ち、傾斜して行ったのかは、改めて考察すべきであると、田中は指摘しているⁱⁱⁱ。

iii 田中 [1977] ⑤、408ページ。

以上に劣らず重要なことは、またそれが本稿の作業にもかかわると思われるのだが、米欧回覧の後、アジア、アフリカに寄航しつつ、その記録をもこの『実記』に含めていることである。この部分を丁寧に読むことで、使節団のヨーロッパ文明に対する視座が、逆噴射によってかえって浮き彫りにされると見るのである。つまり、『回覧実記』の構成と内容には、使節団の東西文明観ないしは世界観が示されるのであり、幕府に代わって天皇を頂き、廃藩置県によって日本の統一に踏み切った、若い日本の指導者たちの、天皇制と言う枠組みの中での近代国家建設の模索の旅ともみなしうる、と解釈するのである。^{iv}

アメリカを出発点とした使節一行は、イギリスから西ヨーロッパ諸国を一巡して地中海を経由し、スエズ運河から紅海を経て、インド洋を渡り、日本へと向かう。この地中海以降が、「帰航日程」とされる第94巻以下を構成している。それまでの一行が、どの国の場合でも、ただ上陸するだけでなく、関係役所、諸施設を回り、豊富な挿絵を残すまでして、社会経済、政治、文化、諸習慣などを全般として記録しようという意気込みによって、読者をも引き込む迫力を持っていたが、この94巻以後は、上陸しない場合もあるだけでなく、上陸したとしてもその港周辺での行動はするものの、米欧のように貪欲なまでの関心が薄れたかのようにも見える。

それは、第89巻から、第93巻までを使用して、「政治」「地理」「運漕」「気候」「農業」「工業」「商業」全般にわたって、言わば本来の目的を一応終えた結果として、回覧の「総括」を行った後になるからかも知れない。

3. 『回覧実記』の固有名詞表記—国名、地名を中心に—

以下に作表したのは、岩倉使節団が、米欧の研修を終えてマルセイユを發った明治6年7月20日から、同年9月13日に横浜港に帰港するまで、この『回覧実記』に記された、主として地名と国名の漢字表記

iv 田中 [1977] ⑤、409ページ。

を追跡したものである。日本人は、漢字文化を内生化するため「ひらかな」と「カタカナ」を発明して、外国文化のいわばソフトランディングを行なって来たが、21世紀のわれわれは、漢字文化のみならず、東洋文化とは大きく異なるアルファベット文化とでも言うべき文化の洪水の直中にある。この文化状況が将来いかなるものとなるか予断を許さないが、本稿では岩倉使節団が苦闘した「横文字」の「縦文字」化のあり様を検討して、明治初頭の文化内生の諸相を探る材料としたい。

『米欧回覧実記』の地名表記と国名表記 第94巻「地中海の行程」以降

『回覧実記』における漢字表記

カタカナ表記

馬爾塞	マルセイユ
馬利	メーリー<メアリ>
羅馬	ローマ
巴黎	パリ
以太利	イタリー
亜刺比亞	アラビア
里昂	リヨン
那不兒	ナアブル
細細里	シシリー
拿破崙	ナポレオン

威尼斯	アドリア
希臘	グreek
土耳其	トルコ
埃塞	ヘッセン
橄欖	オリーブ
阿弗利加	アフリカ
亞歷山	アレキサンドル
蘇士	スエズ
驢馬	ドンキー
珈琲	コーヒー
烟草	タバコ
麦酒	ビール

曹達	ソーダ
檸檬	レモン
紅絨	フェルト
彩影	エハガキ

埃及	エジプト
亜刺比亜	アラビア
亜刺伯	アラビア
亜歴山大府	アレキサンドリア

土耳其斯坦	トルキスタン
船槽	ドック
駱駝	ラクダ
亜丁	アデン
錘形塔	ピラミッド
巨人首	スフィンクス
西奈山	シナイ
摩西	モーセ
阿刺伯	アラビア
豪斯多刺利州	オーストラリア

亜丁	アデン
也門	イエメン
瑞典	スウェーデン
芬蘭	フィンランド
椰葉	ヤシユー
噠馬	デンマーク
印度	インド
錫蘭	セイロン
孟買	ボンベイ
伯爾西	ブラジル
波斯	ペルシャ
露西亞	ロシア

椰樹	ヤシ
葡萄牙	ポルトガル
荷蘭陀	オランダ
芭蕉	バナナ
巫来由	マレー
蜥蜴	トカゲ
檳榔樹	ビンロウ

希臘新教	ギリシア新教<正教>
滿刺加	マラッカ
白耳義	ベルギー
日耳曼	ドイツ
爪哇	ジャワ
蘇莫答刺	スマトラ
早堡	ハンブルグ
奄特担	アムステルダム
鳳梨	パイナップル
珈琲	コーヒー

榜葛刺	ベンガル
蘇格	スコットランド
独逸	ドイツ
維廉	ウイリアム
鴉片	アヘン
呂宗	ルソン

印度	インド
露西亜	ロシア
孟賣	ボンベイ
倫敦	ロンドン
上海	シャンハイ
新嘉坡	シンガポール
暹羅	シャム
安南	アンナン
荷蘭佗	オランダ
西班牙	スペイン
西班牙	イスパニア

虎狼痢	コレラ
新嘉坡	シンガポール
瀾滄江	ランサンキャン<メコン>
柴棍	サイゴン
真臘	ツァンパ
甘諸	サトウキビ
東京	トンキン
順化	ユエ
交趾	コーチ
祿奈	ユエ
柬埔寨	カンボジャ

西藏	チベット
仏朗西	フランス
香港	ホンコン
海南	ハイナン

上海	シャンハイ
澳門	マカオ
羅馬	ローマ
馬尼刺	マニラ
厦門	アモイ
揚子江	ヤンスーチャン

以上一行の旅程に従って、『実記』に出現する地名や国名を拾いだして、対応するカタカナ日本語表記を記入することで上記のような表を得た。^{vi}

機会を得れば、『実記』全巻にわたってこの作業を実施する価値はあると考えている。

4. むすびにかえて

『特命全権大使米欧回覧実記』の研究史はかなりの蓄積が重ねられている。

それに対して、屋上屋を架するように、なぜこうした考察を加えるかと言う理由には、一番日本から近い国々であるにもかかわらず、筆者がほとんど訪れたことがないのに、昨年から偶然ながら上海、紹興方面、ソウル

v 久米 [2005] の訳者は、「順化」に注を伏して、正しくは「ハノイ」のことで、久米が仏領インドシナと安南を混同しているし、また安南（現ヴェトナム）の地域区分をも間違っている、と指摘している。すなわち、仏領インドシナは、今のヴェトナムとラオス、カンボジアの三国の総称である。カンボジアを安南の一部とするのもおかしい。また、安南は、北部トンキン、中部アンナン、そして南部のコーチの三部分に分かれる。トンキンの首府はハノイ、狭義のアンナンの首都がユエで、コーチの首都がサイゴンである。ここに言うチャンパは、コーチの一部の古名であるとの解説を加えている。同書、360ページ。

vi 作業を終えてから、二つの言葉の析出に遺漏があったのでここに追加する。和蘭⇒オランダ、顕理⇒ヘンリーである。

などを訪れる機会を得て、さらに本年1月から臺灣フェローシップの招聘で比較的長期にわたり臺灣に滞在することになったことから、台湾語を通して漢字表記に接することが自然と多くなったからである。

例えば次のようなことを考えてみよう。すなわち、ドイツは、日本では、独逸と表記するが、中国語では德意志、^{vii} 德国となり、フランスは、日本では仏蘭西（旧字体：佛蘭西）、中国語では、法蘭西と表記するし、イタリアは、日本では伊太利亜、伊太利、以太利などと表記するが、中国語では、義太利、意大利と表記する、また、アメリカ合衆国は、日本では亜米利加と記述するが、中国語では「美利堅」、「美国」と表記される。

ここに析出した外国名・地名の表記の仕方は、おそらくほとんどの場合、中国・日本と言うそれぞれの国の発音が元になって漢字表記が発生して、その後次第に定着したのだと推測されるが、戦後教育を受けた世代の方が多数派となって、国名・地名に遭遇する場合には、些細な相違かも知れないが、一瞬戸惑うことになるのも事実であろう。何故どの時点で国名や地名に付する漢字が定着したのか、この『実記』はそれを判断する有力な手がかりではないか。中国語の表記は中国語の専門家に委ねるとしても、日本語の場合、この問題を整理する必要があるだろうと考えたのである。

参考文献

- 久米邦武篇・田中 彰校注『特命全権大使米欧回覧実記』全5冊、岩波書店、1977-82年。
久米邦武篇著・水澤 周訳注・米欧亜回覧の会企画・現代語訳『特命全権大使米欧回覧実記』全5冊、慶応義塾大学出版会、2005年。

vii ドイツは原語、若しくはオランダ語の Duits が起源だとする説もある。

viii 「美国」より以前には「花旗国」と呼ばれベトナム語でのアメリカの呼称である「Hoa Kỳ」は「花旗」の音読であるようだ。これはアメリカの国旗（星条旗）を見た中国人が、そのデザインを気に入り「花のように美しい旗の国」と表現したためであるとも聞く。1902年に上海に支店を出したシティバンクは花旗銀行と呼ばれているのだそうである。

グロサリ：『特命全権大使米欧回覧実記』帰路に見る固有名詞表記
612 ———— 地名・国名を中心として ————

田中 彰『岩倉使節団－明治維新のなかの米欧－』講談社現代新書、1977年。